1

新幹線の扉がシュッという音をたて開き、坂田勇吉は一歩を踏みだした。
初めて立つ大阪の第一印象は、
（暑いな）
だった。
プラットホームの雰囲気は、東京駅のそれより広くて、人の数も少ないような気がする。にもかかわらず、湿度が高いのか、むし暑さがあった。
プラットホームを数歩歩いたところで、坂田はさげていたジュラルミンのアタッシェケースの把手を握りなおした。掌に汗がふきでてきたようだ。
そして立ち止まったのを機会にあたりを見回した。

別にどうという景色ではない。同じ列車から吐きだされてきたのは、坂田と似たようなスーツ姿のビジネスマンらしい男たち、斜め前の座席でも扉ふきんで坂田の背後に立ったときも、片ときも喋るのをやめなかった中年のおばさんのふたり連れ、職業のよくわからないサングラスをかけた髪の長い男などだ。
立ち止まった坂田を追いこし、「出口」の階段に向かって歩いていく。
ベルが鳴り新幹線が発車した。一時二十分に東京駅をでた「ひかり」だった。最終駅は岡山である。
速度を増した列車は、やがて車窓の見分けがつかなくなり、坂田の視野から姿を消した。
（岡山か、いったことないな）
ふっと思い、次いで坂田は苦笑した。いったことがないといえば、この大阪もそうだった。
とにかく、箱根より西に彼がやってきたのは、これが初めてだ。
坂田勇吉は、東京生まれの東京育ちだった。坂田と同じ名前をもつ祖父は、文京区の白山で風呂屋を営んでいた。べらんめえ調で喋る江戸っ子で、酒好きがたたり、坂田が中学生のとき脳いっ血で亡くなった。父はサラリーマンだったが、祖父が亡くなってからは風呂屋を潰してコンビニエンスストアとマンションを建て、会社をやめてしまった。もっとも、コンビニの店番は、近所の酒屋の娘だった母がもっぱらあたり、父は町内会の世話役が主な仕事

で、祭りやらカラオケ大会、ゴルフコンペの幹事だと、遊ぶことばかりで走りまわっている。

のんきな生活だ、と思うが、そう悪い人生でもないようだ。坂田も、いずれは自分も同じような生活を送るのではないかと思っている。

まずそれには、母のように、口うるさくはあるものの、働き者のカミさんをもらわねばならないが。

そういえば、初めて箱根より西に彼がでていくチャンスを奪ったのが、祖父だ。

『箱根よりこっち、お化けはいねえ』が口癖だった祖父が、脳いっ血の発作を起こして倒れたのが、坂田の中学の修学旅行の前夜だった。

救急車で運びこんだ病院の医師は、今夜がヤマだ、といい、その言葉通り、早朝の五時過ぎに、祖父は息をひきとった。

同級生たちが京都の古刹を巡っている間、坂田は小学生の頃さんざん境内で遊んだ町内の寺にいつづけたのだ。

（同じ寺でもえらいちがいだな）

祖父を失った悲しみとは別に、そう思ったのをよく覚えている。

二度めの機会は高校の修学旅行だった。このときは、旅行の二日前に急性盲腸炎の手術をうけたのだ。

一度めほどは残念には思わなかった。危く腹膜炎を併発しそうになっており、ひどく苦しい思いをしたので、それから解放された安堵感のほうが強かった。

一浪して大学に入ってからも、なぜか関西にいく機会はなかった。北関東にある国立大に入学したせいで、友人の大半が関東から北の地域の出身だった。北海道や東北に旅行することはあっても、西にはいっていない。

自分ではそれを奇異だとは思っていなかった。大阪や神戸という街の存在はもちろん知っている。だが、東京でずっと育ったせいか、興味はさほど湧かない。女友だちが、京都にいきたい、というのを聞くと、なんとなく雑誌やテレビに踊らされている、と感じてしまう。

関西には異文化がある、などという週刊誌の記事などを見ても、だからどうした、という感じである。土地がちがえば人もちがうのだから、文化がちがうのは別に関西に限らないのではないか。

京都、大阪、神戸だけをとりたててもちあげる必要もないだろう、と。

以前、そのことで名古屋出身の同僚と論争したことがある。その男の意見では、坂田のように「生まれ育った土地を離れたことのない、特に東京人」は、土地の文化の差異に対して鈍感なのだ、という。

理由は、〝知らない土地でひとりぼっちだ〟という孤独感を味わったことがないからだ、と。

「そんなことは関係ない」

坂田は反論した。どこの土地の出身者であろうと、異文化に対し敏感な人間もいれば、鈍感な人間もいる。坂田が東京生まれの東京育ちであっても、外国にいけばやはり、はっきりと文化のちがいは感じるのだ。

「外国、ね」

坂田の言葉に、その男は鼻で笑うようにいった。

一瞬、坂田はむっとした。そして自分が東京生まれの東京育ちだから、この男はつっかかってくるのではないか、と思った。妙なコンプレックスを自分に対し、抱(いだ)いているのではないか。

さすがにその場では坂田はそれを口にはしなかった。が、口にしなかったことじたいが、コンプレックスの反対、つまり、漠然(ばくぜん)とした優越感を、彼が地方出身者に対し感じていることを証明もしていた。

何の意味もない優越感であることはわかっている。が、

「どちらの出身ですか」と訊ねられ、

「東京です」と答えるとき、心のどこかにふくらむものがある。また、サラリーマンである限り、たとえ重役になろうと、東京都内に一軒家をもてないこの土地状況の中で、「我が家」が山手線(やまのてせん)の内側にあるというのは、絶対的な価値であることを、坂田は社会人になって

から悟った。

この続きは、書籍でお楽しみください。
◎注意
本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。
個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。